

① ① 手口
② 人生
③ 糸目

④ むらびと
⑤ きゅうじつ

② ① ア
② はずかし

③ クラスでー
④ ウ

⑤ (5 完答)
あ
ウ
い
イ
う
ア
⑥ ウ

③ ① イ
② ウ
③ エ
④ ア
⑤ カ
⑥ オ

④ ① 魚
② (2 完答)
あ
ア
い
ウ
う
イ
③ ア
④ ア
⑤ イ
⑥ ウ
⑦ 2

配点	
①	各2点×5=10点
②~④	各5点×18=90点
<計>100点	

① 「手口」はわるいことをするときのやりかた。③ 「糸目をつけない」は、お金をいくらでもつかうこと。④ 「人」の読みが「びと」になることに注意しよう。このように、上や下にくることばによって、読み方がかわることがある。たとえば、「雨戸」は「あめ」と「と」だが、合わさると「あまど」になる。

②

1 ——線①の次の行は「沢木なな」について説明しているところである。問題は、その「四月に転校してきた、おとなしい」「まだ友だちがでずに、いつも一人でいる」なながまたどうしたのかをきいて、「よくないもの」を答えなければならぬ。アの「ひとりである」は、沢木なながどういふ子かの説明であり、またどうしたのかをのべているのではない。

2 顔や耳が赤くなるというのは、はずかしいときやおこっているとき、さむいときのようなものである。ここでは、あとのほうにもう一度「耳もまだ赤い」と出てきており、そこに気持ちが悪く書かれている。

3 ——線③をふくむ一文は「同じクラスメートのまま、三年生に進級したので、かわらないはずだった」となっている。つまり、進級する前と「かわらないはず」だといっているのである。進級する前の話はすぐ前の文「二年生のとき、クラスで一番成績がいいのはルミだった」に書かれている。

4 ——線④をふくむ一文は「あのことが転校してこなかったら、あたしが一番だったのに」である。「転校して」きたのは「なな」、その前に「一番」だったのは、3で見たように「ルミ」である。

5 「あ」は、「顔をそむけ」るようすだから、気をわるくしているのだろう。少しはらをたてている感じである。「い」は、今にも雨がふり出しそうな「梅雨」の空のようすである。「う」に「こっそりと」がはいるのは、きっと親は学校に「むかえ」に「こないことになっているのだろう」とかんがえる。

6 「梅雨」の話は次のだんらくにも書かれていて、そこに「ルミの母親は……むかえにこられない」とある。これがウの「さびしい思い」につながる。

③ 「たぶん」ということばをつかって何かをいうときは、「……だろう」のようないかたでいいことをしめくくる。これと同じタイプのことばを出題した。声に出して読んで、「感じ」をつかんでほしい。

① 「きつと……だろう／＼にちがいない」。

② 「たとえ(たとい)……でも(でも)」。

③ 「どうか……ください」。「きつと」も入らなくはないが、そうすると①の答えが決まらなくなる。

④ 「なぜ……か」。

⑤ 「だんじて……ない」。「ゆるせません」は「ゆるせない」のていねいいかたである。

⑥ 「まさか……ないだろう」の形がきほんだが、「まさか……なんて」の形で、信じられないという気持ちをあらわすことがある。

④

1 カワウがとらえるものである。文章のはじめに「魚とりの名人」と書かれていた。文章のはじめにはだいなことが書かれていることが多いので、しっかり読んでおこう。

2 「からだを」あのように細くし」だけならば、「ヘビ」でもよさそうに思えるが、「勢いよく潜って」いくようすなので「矢」のほうがよい。また、ここで「矢」をつかわないと、「矢」のつかいみちがなくなってしまう。イの「ゴム」は「自由自在に曲がり」より「伸び縮み」のほうがびったりくるだろう。くねくね曲がっているのはヘビである。

3 ——線②をふくむ一文は「この姿から『鵜呑み』という言葉がうまれました」である。「この姿」は「大きな獲物もスルリと呑みこむ」姿だろう。人にいわれたことを何でも「呑みこむ」感じをあらわすことばである。

4 アについて、カワウは「魚」ではない。「クチバシ」とあるので鳥である。イについて、「潜りのたくみさ」は四・五だんらくに、「とらえた獲物をのがさず」は六だんらくに、「一息に呑みこめる」は七だんらくに書かれている。ウについて、カワウが獲物を呑みこむのは、七だんらくにあるように「水上へもど」ってからである。